



第 615 回 念を入れて生きる

2015.2.8

小生、生来の天邪鬼ゆえ、説教話は最大の苦手であると、俗っぽく言うとそういうことなのだろう。が、歳を重ねるごとに、心に深く染み入る言葉といくつも出会うこととなった。先般、ある法事の席で方丈様の法話を聞いた。「『朝』と書いてみて下さい」と仰り、続けて「どう読みますか？」と質問した。当然のように、「あさ」とか「ちょう」と答えると、方丈様は「十月十日(とつきとおか)とも、読めるんです」と仰り、次のようなお話をされた。

…十月十日(とつきとおか)は、人間として誕生するまでにかかると言われている日数です。だから、人間は毎朝、新しい命を貰って生まれ、そして夜、眠りにつくのです。そのまま目覚めないかもしれないところ、翌朝また新しい一日を貰う。明日があると思わず、今日この一日を大事に過ごそうと思うことがとっても大切です。お釈迦さまも、「過去を追うな、終わってしまったことに縛られるな。まだ来てもない未来に煩わされるな。今というこの一瞬、今日というこの一日を大切に生きて生きよ、と教えています…

今、目の前にいる人、目の前にあることを大事にすること。つまり、目の前にいる人に喜んでもらう生き方。愚痴や悪口や不平不満を言わず、明るく感謝の心で接すること。一瞬一瞬に念を入れて生きることの大切さを説いたものだった。

心学研究家・小林正観氏の「念を入れて生きる」という思想がある。

『念』という字は、『今』の『心』と書く。過去のことを踏まえるが、捉われぬ。将来のことを見据えるが、振り回されぬ。今現在、自分の目の前にある(為すべき)ことを、大切にすること。将来こうなったらどうしよう、ああなったらどうしよう、過去に違う選択をすればよかった…そんな風に思い煩う人は多いようだ。しかし、それは全く無意味なことかもしれない。今、目の前にいる人、目の前にあることを大事にする心でもって、「目の前にあることを一生懸命やりなさい」ということにほかならない事だろう。そして、その心を「実践」することが肝心となる。自分と接する人に優しい言葉をかけ、やさしく接し不平不満・愚痴・泣き言・悪口・文句を言わず。非難、攻撃、中傷をしない。いつもニコニコしていて、自分が喜ばれる存在でありたいと思いながら、生きていくことが一番理想的で人に喜んでもらえる生き方のようなのだ。それは正に、『念を入れて生きる』という生き方である…小林正観氏はその著『すべてを味方 すべてが味方』で述べている。

偉い人の説教は、素直に聴くべし！ やっとそれに、気が付いた。特に高齢者予備軍は、それを自分なりにインプットし咀嚼して、新たなエネルギーにしなければ、ただやたら、無闇に老いていくばかりである。歳をとつての天邪鬼は単なる「頑固爺」、実に困った厄介者に分類される。可愛いおじいちゃん、頼れるおじいちゃんを目指すべきは、まだまだ鍛錬が必要のようだ。